

漂う先行き不透明感 — 2期目のオバマ政権



共同通信社 ワシントン支局
記者 林 浩正

2期目に入ったオバマ米政権。オバマ氏は就任式での演説で、経済立て直しや銃規制強化、地球温暖化対策などの課題解決に強い意欲を表明した。しかし、下院で多数を占める野党共和党との対立が激化する中、政策実行は容易ではなく政権運営には不透明感がつきまとう。実績を残した大統領として歴史に名をとどめるには、党派対立の克服と2014年の中間選挙で勝利できるかが鍵となる。失敗すれば、急速なレームダック化は避けられない。

苦境に自嘲する大統領

13年1月21日、凍てつく寒さに覆われた首都ワシントンの連邦議会議事堂。2期目の就任演説に臨んだオバマ氏は「前進のために必要なのは、議論ではなく行動だ」と全米から詰めかけた約70万人の聴衆に訴えた。「行動」という言葉に力を込めたことが、オバマ氏の置かれた現実を如実に表していた。

08年大統領選で歴史的勝利を取めたオバマ氏。与党民主党が議会上下両院の多数を制しており、国民の高支持率と合わせ「これ以上ない最強の態勢」(外交筋)で政権をスタートさせた。しかし、民主党は10年の中間選挙で共和党に歴史的な大敗を喫し、下院は少数に転落。議会は日本の国会と同じ「ねじれ」状態に陥った。オバマ氏の政権運営の目算はここから狂い始めた。

当選回数が物を言う米議会で、上院議員経験が

浅いままだ大統領に就任したオバマ氏は、ワシントンでは日常茶飯事に行われている根回しが「得意とはいえない」(外交筋)という。関係者によると、オバマ氏は記者会見で重要提案を行う場合でも、共和党側に事前通告しないことがあったとされる。水面下での駆け引きよりも、世論に訴え、それをテコに議会を動かすという手法を重視しているためだ。しかし、このやり方は共和党の反発を招きかねない。民主党が議会を支配していた政権発足当初は通用しても、「ねじれ」で共和党との対立が先鋭化している現在では「マイナス効果」(同)の方が大きいといえる。ホワイトハウスと共和党指導部との「すれ違い」を生む原因の1つになったとの見方もある。

大統領が就任演説で訴えた「行動」という言葉には、こうした「ねじれ」による党派対立で停滞しがちな議会へのメッセージが込められていた。同時に、オバマ氏が直面する「苦境」を象徴するシーンともいえた。

思うに任せぬ議会との関係にいらだちを隠せなかったのか、オバマ氏は最近開いた支持者集会で自嘲気味に漏らした。「大統領がスピーチすれば、(地球温暖化対策など政策面での変化が)すぐさま起きるわけじゃない」。

のしかかる険しい財政問題

オバマ氏の最大の使命は、落ち込んだ米経済の立て直しだ。現時点で、米経済は基本的に個人消費を中心に回復基調が続いているとの見方が多い。「シェールガス」の生産拡大がエネルギー価格